

放置竹林問題解消を目指したメンマづくりに関する取組

宮城県気仙沼地方振興事務所林業振興部 技師 吉田 有希

1 はじめに

国内では竹材やたけのこの生産が減退したことにより、管理が行き届かず荒廃した竹林（図1）が増加し、周辺の森林へタケが侵入する事例（図2）も増えています。この結果、森林の公益的機能が低下し、土砂災害リスクが高まることが懸念されるほか、野生動物の住処となって周辺に農業被害を招くおそれがあることから、放置竹林の解消に取り組む必要があります。



図1：管理が行き届かず荒廃した竹林
（気仙沼市）



図2：タケが侵入した森林
（南三陸町）

竹資源の新たな活用方法については、竹炭や日用品、土壌改良資材等、様々な用途での活用が検討されており、中でも、メンマは、たけのこととしての収穫時期を過ぎたものを活用することで竹林整備を進めることができます。また、現在国内で消費されるメンマのほとんどが輸入品である中で、「国産メンマ」づくりの取組が全国的に広がっている状況です。

当管内では、令和元年から「気仙沼メンマ」（図3）づくりを開始し、気仙沼市の竹林所有者とともに試行錯誤を重ねてきました。その結果、令和5年には、仙台市内の飲食店主催のイベントで、ラーメンの具材として提供されるまでに至りました。しかし、生産者が1人のみの体制のため、令和5年の生産量は約6.5kgにとどまっています。

地場産品として安定した供給を目指す上で、生産工程（図4）のほとんどが手作業で、この体制のまま生産量を大幅に増やすことは困難であることから、令和6年度は生産者数を増やすことを目指して取り組みました。



図3：気仙沼メンマ

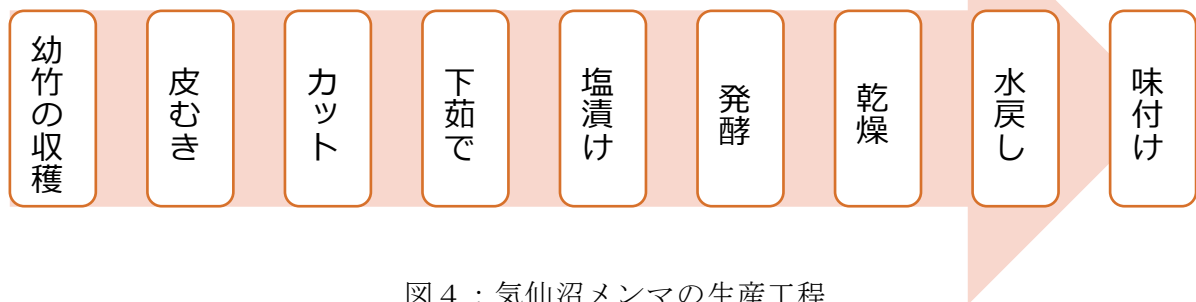


図4：気仙沼メンマの生産工程

2 取組内容

(1) 新規生産者の開拓・生産支援

① 生産者への個別支援

市町や特産林産物生産者と連携し、メンマづくりに関心がありそうな個人・団体の情報提供をお願いしていたところ、気仙沼市本吉町で1人、南三陸町で1団体が試験的にメンマづくりに取り組むこととなり、完成までの全工程において合計10回の個別支援を実施しました（図5）。



図5：乾燥工程の支援

② 体験会の実施

地域の方を対象に、メンマづくりのイメージを持ってもらうことを目的に、塩漬けまでの工程を「メンマづくり体験会」として合計3回実施しました（図6）。

1 幼竹の収穫



2 皮むき



3 カット



4 下茹で



5 塩漬け



6 意見交換



図6：体験会の実施状況

(2) 販売促進に関する取組

① 直売会への出展支援

販売機会の確保を目的として、県の合同庁舎で定期的に行われる地場産品直売会に合計2回出展し、味付メンマや乾燥メンマを販売しました。

② 販売促進ツールの提案

新規の生産者に対しては、販売する際の商品名や販売促進ツールの提案を行いました。

③ イベントでのPR実施

メンマづくりに関する取組を外部に発信することを目的として、気仙沼市産業まつり等のイベントにおいて、メンマの試食提供やメンマづくりについて紹介したパネルの展示を行いました(図7)。



図7：イベント出展状況

3 成果

(1) 新規生産者の開拓・生産支援

新規生産者への定期的な個別支援を実施した結果、令和6年度に試験的にメンマづくりに取り組んだ個人・団体において、両者ともメンマづくりに成功しました。これにより、令和5年度までは管内で1か所のみであった生産拠点が3拠点に増加し、生産量も6.5kgから20kgまでに増加しました。

また、メンマづくり体験会には合計38人が参加し、幼竹の収穫体験から塩漬けまでの作業を一緒に行いました。作業後の意見交換会では、「毎年採りきれないくらいタケノコが発生するので、メンマとして活用できる取組はおもしろい」という前向きな意見だけでなく、「想像していたよりも重労働であった」、「国産メンマが希少であることは分かったが、メンマを作っても商品として売れるものなのか」という意見もあり、活発な意見交換が行われました。

(2) 販売促進に関する取組

地場産品直売会では、出展した2回とも、販売会の終了を待たずに完売する人気ぶりでした。生産者が購入者と直接かかわることにより、自分の商品の関心度の高さを実感しているようでした。

また、新規の生産者に対して、販売に当たり商品名の提案を行い、国内有数のつつじの名所として知られる徳仙丈(とくせんじょう)山の付近で生産していることにちなみ、「特選上つつじメンマ」と名付けました。また、この名称にあわせたポップデザイン(図8)も提案したところ、販売する際に活用していただくことができました。その結果、直売会だけでなく、定期的に行われる軽トラ市などへの出店体制を整えることができました。



図8：「特選上つつじメンマ」ポップデザイン

特選上つつじメンマについては、気仙沼市産業まつりにおいて試食会を行い、一部の方にはアンケートにも御協力いただきました。その結果（図9）、特選上つつじメンマの品質がおおむね好評であっただけでなく、回答者の約4割が「メンマづくりに取り組んでみたい」という結果になり、メンマづくりに対して潜在的なニーズがあることが分かりました。

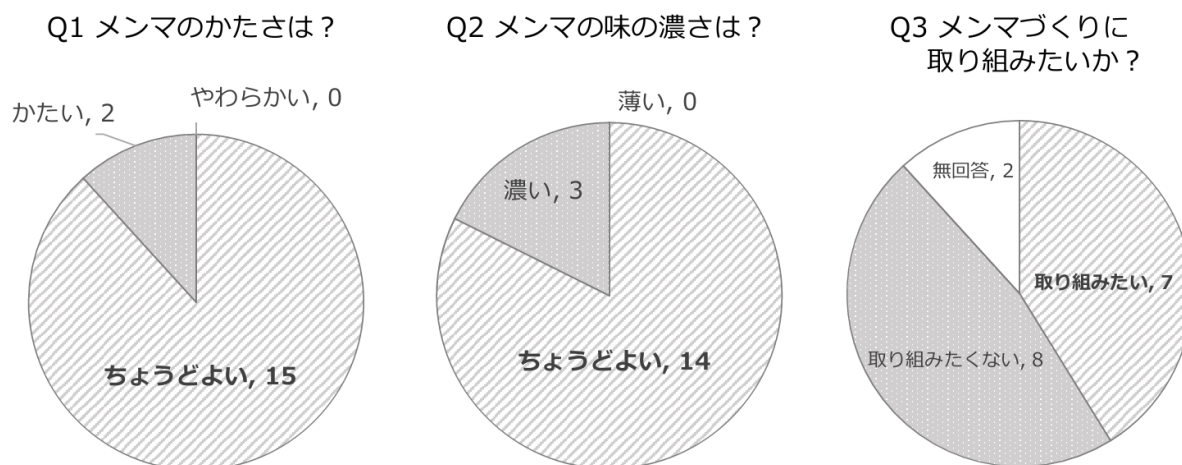


図9：「特選上つつじメンマ」試食にかかるアンケート調査結果

4 課題・展望

（1）課題

課題として、生産工程が全て手作業であり、生産者の負担が大きいことが挙げられます。特に幼竹の収穫が重労働であり、生産量を増やすに当たっては最大の障壁となっています。また、発酵過程では、事前に発酵液を準備する必要がありますが、カビが発生して作成に失敗し、後処理や作り直しといった追加工程が発生するという事例も多くありました。これにより、さらに生産者の負担が増大することから、より生産工程を省力化することが望ましいと考えます。今後は「工程の分業化」と「工程の簡略化」についても検討していきます。

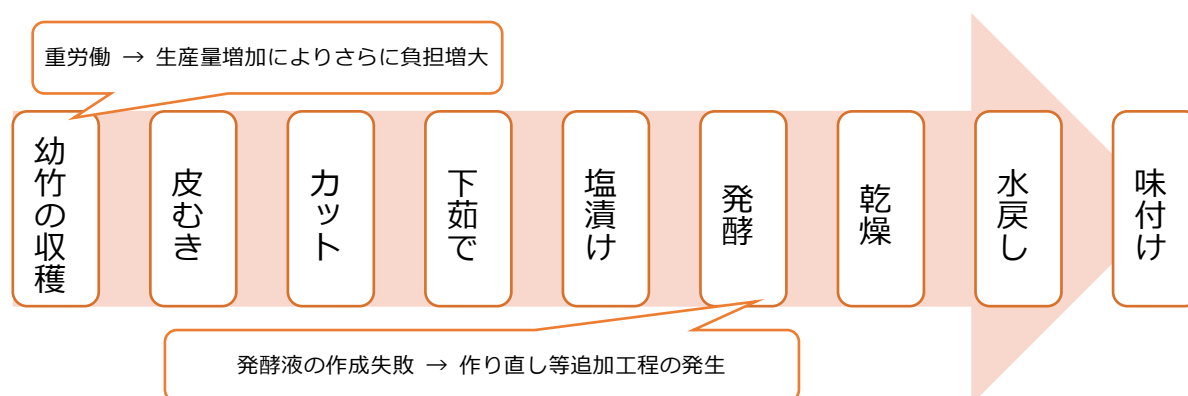


図10：生産工程における課題

(2) 今後の展望

① 工程の分業化

メンマづくりの工程の中で、特に労力のかかる幼竹の収穫工程を、管内で竹林整備を行う団体と連携することを検討しています。これにより、竹林整備団体が収穫した幼竹を、メンマ生産者が加工するという分業体制が実現し、両者の得意分野を活かしながら、生産にかかる負担を軽減できると考えます（図11）。

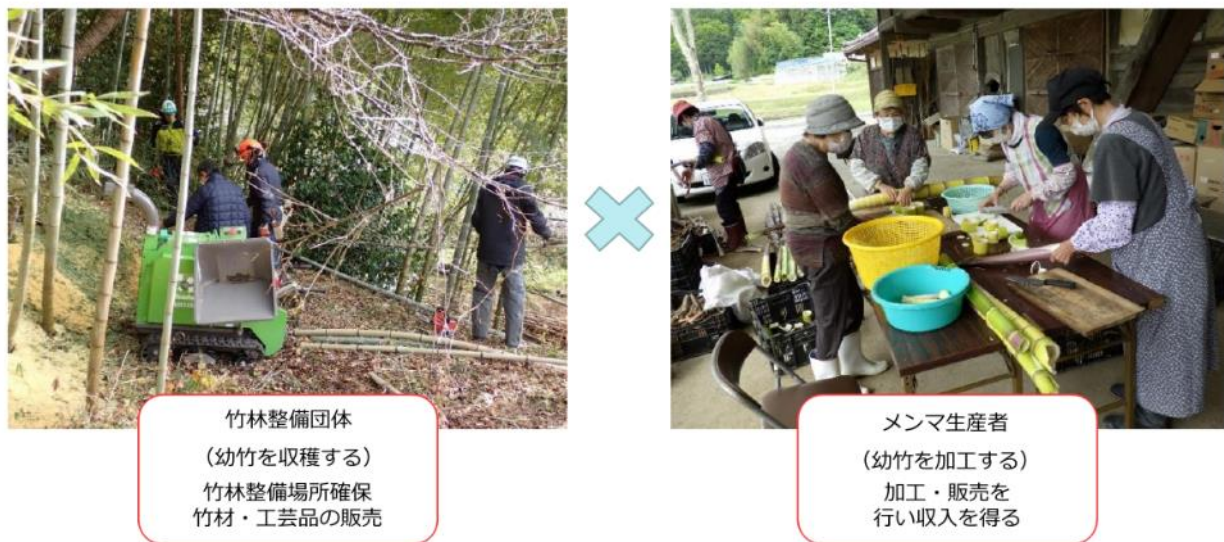


図11：工程の分業化イメージ

② 工程の簡略化

全国で行われているメンマづくりの取組の中には、塩分濃度を調整し、発酵過程を省略している事例もあることから、その事例を参考にして、発酵液を使用しないメンマの試作を行っています。今後生産者と食べ比べを行い、好評であれば、来年度以降のメンマの生産工程の省力化を実現できると考えます。

今後も、引き続きメンマ生産者に対する支援と、PRを通じた新たな生産者開拓を行うとともに、竹林整備団体をはじめとした関係各所と連携することにより、メンマづくりを1つの柱として地域全体で竹林整備を推進することで、放置竹林問題の解消を目指してまいります。